

丸岡藩騒動記 作造の仇討 作造と太田又八 (1) (No.1~6)

作造が太田又八に出逢ったのは天和2年(1682)の正月3日、場所は丸岡城下の国神神社であった。境内で雪搔きをしている作造に又八が声をかけてきたのである。作造は鳴鹿山鹿村の百姓で農閑期には城下で出稼ぎをする。それでも例年なら年末年始は休み、元旦には家族そろって白米飯と干し鰯、煮濁酒で祝うのが常だった。だが昨年今年は暮らしに窮して晦日正月も休みなく働いている。年末は正月準備、晦日の篝火用の薪割り、年が明けると晦日から降り続けている雪の始末に追われていた。

神社に泊まり込んで働いている作造に正月気分があるはずもなく、この三日間も玄米に雑穀を混ぜ込んだ糍飯と野菜の煮物、味噌だけの粗末な食事雑用、といっても体力を消耗する力仕事なのだが、黙々とこなしていた。それでも恵まれている方で仕事にあぶれた者は雑穀さえ口にできず飢えながら正月を過ごしていた。

餓えに耐えかねて盗みを働く小盗人、白昼徒党を組み豪農、大商人の家に押し込み、米、雑穀、濁酒などを強奪する無法者もいた。いつもなら犯人は容易に割り出され即座に捕縛されるのだが、最近はこの類の犯罪が多発し役人の手が回らない。それを見こして盗み強奪がさらに横行するという悪循環に陥っていたのである。

貧民が増大し、犯罪が横行した原因は二年続きの大凶作にあった。前々年の延宝八年(1680)に台風が日本を直撃して各地で河川が氾濫、田畑が冠水し農作物が甚大な被害を受けた。台風の被害は越前のみならず全国に及び凶作となり小作農は貧民に転落し困窮、なかには餓死する者もいた。

九年に入ると夏場の旱に苦しんだ。極端な水不足は作物の生育を阻み、加えて巨大台風がまたも日本を襲った。辛うじて育った稲も吹き飛ばされ収穫は激減した。二年続きの凶作は大飢饉を引き起こし、昨年に増して多くの民が餓えた。とりわけ苦しんだのは皮肉にも米の生産者である農民であった。

江戸時代、農民は人口の8割強を占めていた。彼等の生活を支えていたのは稲作であり、凶作となれば生活の根底が崩れた。収入を他の道に求めようにも受け皿となる働き場はない。入会の山野で柿、アケビ等の果実、ドングリ、ギンナン、栃の実、栗などの木の実、山菜、ヤマイモを採集して飢えを凌いだ。だがそれも晩秋までで、冬になれば降雪が入山を阻み、それすらも手に入らなくなった。

やがて城下を徘徊する物乞いが目に付くようになった。彼等のなかには行き倒れとなっ

て路傍に屍を曝す者もいた。死を逃れるために盗み、押し込みに走る者もいた。作造も彼等と同じ境遇にあったが、物乞いになることもなく盗みに走ることもなく家族を守っていた。

加賀越前にまたがる加越山系から越前の平野を流れ日本海に注ぐ九頭竜川がある。作造はその九頭龍川の堤防近くに二反余りの田圃を有していた。もちろん自作地だけで生活はできず小作人として働くという、この辺りでは典型的な小作農民であった。それでも一家は作造、母のヨシ、女房のタエ、長男喜助、長女キクが貧しいながらも肩を寄せ合って生きてきた。

穏やかな生活が一変したのは延宝 8 年の台風で、豪雨によって増水した九頭竜は堤防を越え田圃を泥沼と化した。その年、作造の田圃からの収穫は皆無で小作料も前年の半分以下であった。小作農一家に蓄えがあるわけもなく、来年用の種籾はもとよりなく、手持ちの食糧で春まで一家を食いつながせることは不可能だった。

作造は大地主でもある庄屋の宗衛門から米を借り、種籾を残して米の大部分を安価な雑穀に変えた。とりあえず飢えからは脱したのだが日々の食事は僅かな玄米に麦、粟、稗、などの雑穀類、木の実、大根などの野菜を混ぜた糍飯で、川魚、田螺蛸を添えて飢えを凌ぐという粗末な食事だった。

だが災難は続いた。悪性の風邪が城下、村々に蔓延した。ヨシも罹病した一人で延宝 9 年 2 月、四十八年の生涯を閉じた。遺体は 3 年前に死んだ夫に寄り添うように埋葬された。この年、飢饉に風邪の流行が重なり幼子、年寄りの死がいつもの年に倍して多かった。

春になり作造、タエは田植えで多忙を極めた。自作地を早々に済ませ、夜明けから日の落ちるまで庄屋から小作を引受けて働いた。だが梅雨の季節に雨は降らず夏の酷暑で大地は干上がった。旱魃の被害は深刻で作物は枯れ、僅かに育った稲も二年続きの台風の直撃で吹き飛ばされ収穫は激減した。

延宝年間には 8 年、9 年の台風被害だけではなく、5 年に十勝沖地震、房総沖地震、6 年には宮城北部沖地震が発生している。相次ぐ災害に元号は 9 年 9 月 29 日（1681 年 11 月 9 日）、改元されて天和となった。

天和元年の師走は前年に増して悲惨であった。物乞いが巷に溢れ、餓死者が続出した。事態の深刻さに藩も動きを見せた。貧民への施米をおこなったが、藩財政も悪化しており、焼け石に水の状態だった。

作造一家も困窮した。昨年の飢饉は借米で切り抜けたが、凶作で返済が滞った今年は追加の借米は断られた。それでも二反の田圃を形に米を借りた。

むろん作造は田圃を手放すつもりはない。そのためには必死に働き来年の収穫で返済しなければならない。できなければ田圃は取り上げられる。餓えても種籾には手を付けず、玄米の姿さえ見えぬほどの糍飯を常食としながら来年の収穫に望みを繋いだ。だが師走に入ると雑穀すらも尽きはじめた。山で雑木を切り、薪として町家に売り歩き、そのかたわら土木、大工、荷役等の力仕事を引き受けて幾ばくかの銭、食べ物を貰って生活の糧としていた。彼は仕事を選ばず、骨身を惜しまず働いたから依頼主の評判もよく仕事が途切れることはなく、仲間に仕事を回していた。

それでも路上に放置されていた死体の埋葬は断った。死因は餓死ではなく疫病との噂が流布しており、協力してくれる仲間がいなかったからである。身元不明人の死体は人里離れた山間の無縁墓地に埋葬されるのだが、その仕事は賤民が担っていた。だが疫病の噂が広まると（実際は流行性の風邪なのだが）、伝染を恐れて彼等は仕事を拒んだ。困った役人が死体の埋葬を作造に依頼してきたのである。作造も断り、誰からも見放された死体はいっそう無残な姿を曝し続けていた。このままでは正月を迎えられない、死体を川に流そうという声が町方衆からあがった。

いったんは断ったものの路傍の仏が哀れでならぬ。無残な姿に心を痛めた作造は仲間を説得し埋葬の仕事を請け負った。彼等は仏を丁重に扱い、埋葬を終えると手を合わせて成仏を願った。仏は我が身だったかも知れないのだ

丸岡藩家老、太田又八は作造の行為を浄土宗本光院月窓寺住職、寂誉から聞かされた。

本光院は本多家の菩提寺で本多重次（作左衛門。成重の父）、成重（本多丸岡藩初代藩主）、重能（2代藩主）、重昭（3代藩主）が祀られている。又八は重次以下、歴代藩主の命日と師走29日と正月3日に墓参りをする。その後、寂誉から茶菓の接待を受け雑談を交わす。この雑談が又八に城下の貴重な情報をもたらした。

寂誉は頼まれれば町屋にも出かけて御経をあげる。気さくな人柄で、心を許した主人や女房は城下の出来事を具に話した。

「一本田の地主、藤右衛門が苗字帯刀を許されたそうですが、城中のお偉方に米2百俵献上したという噂があります」という話から、

「吉屋の旦那が妾を囲いました。その妾というのが50俵(20石)取りの下士の娘だそうです。お金で買われたのですが、こうなると百姓もお侍もないですな」

「北前船が頻繁に三国湊に寄港していて、上新町(福井藩)境界では商人や船頭相手の遊郭がたいそう賑わっているそうです。滝谷村(丸岡藩)にも遊郭をつくろうかという話がもちあがっているそうです」

「橘屋さんに盗人が入りまして、それが不思議なことに金目のものにはいっさい手を触れず、米5升だけを盗んだそうです」

「大店の野村屋さんが押しこみに遭いました。夜明け前のことで賊は10人足らずでしたが奉公人は住込みの者、それも大半が女中とあって抗うことはしなかったそうです。幸い怪我人もなく店が壊されることもなかったのですが、蔵にあった米10俵、豆1俵、味噌1樽、酒2樽が荷車に積まれて持ち去られました。言葉訛りから加賀者、おそらく山竹田辺りの国境から入りこんで来たのでしょう。役人が駆けつけた時には加賀領に逃げ込んで、手も足も出せません。まあ、加賀の国でも越前者が同じようなことをしているのしょうから、おあいこですな。案外、双方が示し合わせて企みを練っているのかも知れません」

寂誉は町で耳にしたこと、感じたことを話す。政に関わることであっても口を閉ざさない。

「重益さまは暗愚な殿さまで、政の是非をわきまえず日夜酒食に耽っている。そのような他愛もない流言飛語が広がっております。噂の出所は家臣らしいのです。よりによって家臣の口から殿の悪口雑言とは・・・嘆かわしい限りです」

「城下に浮浪者が溢れています。土地を手放した百姓衆で今は物乞いで生きていますが、そのうち見切りをつけて他国に逃散する者も大勢出てくるのではないかと恐れながら杞憂しております」

寂誉の話をもつて又八は黙って聞くだけだが忸怩たる思いである。彼は家老の要職にある。だが名前から推察されるように名門の出ではない。父は70人扶持(126石相当)の家臣であった。上士(上級武士)とまではいかない。

※1人扶持として支給される米は1日5合、年にして18斗(1.8石)。

父の跡を継いだ又八は利発者で先代藩主、重昭に見込まれ近習に抜擢された。次第に頭角を現し側近となり、重益の治世になると家老に抜擢された。彼が昇進を重ねた経緯、政敵・本多織部との争いについては後述するとして、とりあえず寂誉の話の続きを続けたい。

「師走に入って路上死が目に付くようになりました。浮浪者たちの成れの果てです。物乞いで幾ばくかの食べ物は得られるでしょうが厳寒に老人や病人が路上生活することは無謀です。凍死する者、衰弱して物乞いすら出来ず餓死する者もおります。悲惨なことです」
寂蒼の言葉は鋭い矢となって彼の胸を貫く。

又八は無言のままである。

(殿の噂は事実、流言飛語の類ではない。のみならず家臣は殿に不満を抱いている。それも無理はない。借上げと称して家臣の俸禄の一部を返上させ、酒色に溺れ贅に耽っておれば批判を口にするのも当然であろう)

又八は苦悩する。殿の乱行は家老である又八の責任であるが、彼にしても打つ手がないのだ。

己が享樂の他には興味を示さず欲望のままに行動する、まるで幼児のような重益公である。家臣を犠牲にして己が享樂にのみ心を奪われるようでは皆の心は離れ、家中が乱れる。家臣だけではない、凶作で苦しんでいる民百姓から怨嗟の声も起きようと、理を尽くして幾度となく諫めても馬耳東風である。この頃は又八を遠ざけ、甘言を弄する本多織部の傀儡となっている。

織部は代々家老職を輩出した名門の出である。先代・重昭の治世でも家老職を務めていたが、重昭は織部の狡猾さを嫌い遠ざけていた。重昭が重用したのは老臣・本多十郎左エ門であった。十郎左エ門は謹厳実直な人物で重昭をよく補佐した。延宝4年(1676)重昭が死去し嫡男・重益(14歳)が藩主の座に就くと、十郎左エ門は若年の藩主の後見役となった。

彼はいっそう硬骨漢となり重益を諫め、ときに叱責した。家中にも睨みをきかせ、家臣の(本多織部をさすのだが)勝手な行動を許さなかった。

だが病に倒れた。死期を悟った十郎左エ門は嫡男・刑部と太田又八を枕元に呼び、協力して藩政にあたれ、獅子身中の虫である本多織部を排除せよとの遺言を残し死去した。重益には太田又八を家老に推挙する書状を遺した。

太田又八は家老に登用された。だが、十郎左エ門死去後、本多織部は復権し、一派を結成した。織部は暗愚な重益に酒色の味を覚えさせ、歡心を得ることに成功、藩政の実権を掌握した。一方、又八は刑部とともに織部に反感を抱く家臣を結集し反織部派を結成した。丸岡藩は本多織部派と太田又八が率いる反織部派の対立が水面下で静かに進行していた。

藩内は又八に同意する家臣が多数を占めた。だが藩主・重益を傀儡とした織部に迂闊に手を出せない。ならば一派の悪事を暴きひとりひとり失脚させ、織部を孤立させた上で一気に勝負に出る。それが又八たちの策であった。

(いずれ殿は織部に咬され儂を排除する動きに出る。その前に織部を排除せねばならぬ。だが、それだけで事は収まるのか・・・) 又八は悩む。

(殿を傀儡とするために酒色に溺れさせた織部が諸悪の根源、獅子身中の虫と断じたが、酒色好みは殿の持って生まれた性癖。性癖を抑える自制心が欠如しているのは暗愚ゆえ。暗愚さが容易に奸臣を呼び込む。今織部を排除しても、再び奸臣が現れるだろう。とすれば諸悪の根源は織部ではなく殿、重益公そのものではないか)

(さすれば織部を排除した後、殿に隠居を迫る) 又八の秘めたる決意である。彼はゆっくりと茶をすすった。

「暗い世相ではありますが、士もおりますな。もっとも身分は百姓ですが」寂誉が言う。「ほう、どのような御仁ですか」始めて又八が口を開いた。「浮浪者のなかに路上死する者がいることは先に述べた通りですが、その死骸が放置されたままでした。一昨年から悪い病が流行っており、路上死はその病が原因との噂がたちまして誰も近づこうとしないのです。正月を控えて不吉この上もないと皆が案ずるのですがどうしょうもありません。仕方がなかろうと川に流すことにしたのですが、そのとき鳴鹿山鹿村の作造という男が埋葬を引き受けたのです。彼の者が申すには、『路上死した者も貧農、我も貧農。とても他人事とは思えません。さぞかし現世では悲惨な暮らしを送っていたでしょう。死ねば皆仏との教えがございますが仏になっても犬畜生の如く川に流されては成仏できません。せめて埋葬して弔いたいと思います』あっぱれな心根でございます。むろん異存のありようがございません。作造という男、仲間3人を説得して共に仏を埋葬したのでございます。心根もそうですが、胆力といい、誰もが尻込みする仕事を、作造の頼みならと引き受けさせる人徳といい、見事なものでございます。あれほどの人物家中でもそうはおりますまい」

「その男に逢ってみたい。鳴鹿山鹿村の百姓と聞いたが訪ねてみるか」
「その必要はございませぬ。作造は今、国神社で下働きをしております。年の頃は 25、6、の屈強な男でございますから直ぐにおわかりになります」寂誉が言った。

太田又八は寂誉に礼を述べ、その足で国神社に向かった。又八が作造に声をかけたのはそのような経緯からであった。

丸岡藩騒動記 作造の仇討 作造と太田又八 (2) (No.7~12)

又八は家来二人を供ない^{くにつかみ}国神神社に来た。家臣の参拝^{さんぱい}は珍しくないが家老^{まれの}となると希で周囲はざわめく。社人^{しゃじん}から報告を受けたのであろう^{宮司}が挨拶^{あいさつ}に現れると、「私事^{わたくしごと}だ、気を使わないでくれ」と境内^{けいだい}を見渡す。下働きの男衆^{さんどう}3名ほどが目^{ゆきか}に付いた。その日は昼になっても雪は降りやまず、彼等は参道の雪掻き^{ゆきか}をしていた。
・・・年の頃 25, 6 で屈強な男・・・なるほど背丈は 5 尺 7、8 寸ほどのがっしりした若い男がなかにいた。

又八が近付くと^{けはい}気配を感じたのであろう、作造は顔を上げ怪訝^{けげん}そうな表情を浮かべた。「頭を下げんか。御家老の太田又八さまに無礼だぞ」^{宮司}は作造を叱った。「そのままでよい、そのままでよい。ところで作造というのはその方か」彼は声をかけた。彼の目は笑っている。作造は一瞬緊張した様子だったが深々と頭を下げた。
(御家老がなぜ私の名前を御存じなのか。あの太田又八さまが何用あつて声をかけられたのか) ^{ぎねん}疑念がわく。太田又八の噂は作造の耳にも入っている。

太田又八は家中領民には^{せいれんけつぱく}清廉潔白な武士、性格は峻烈^{しゅんれつ}と知られていた。小身の出ながら先代藩主(重昭)に^{しげあき}近習として仕え、現藩主(重益)にも^{しげます}重用され今や家老職の地位にある。異例な出世に策^{ろし}を弄したゆえにと^{そし}誇る声も家中の一部にある。

又八が家老・本多^{おりべ}織部と対立していることは公然の秘密である。彼が腹心の奉行を使い、織部派の悪事を暴^{あば}いていることも公然の秘密である。当然ながら織部の憎しみは尋常ではなく、罪を問われた織部派の面々も復讐^{うかが}の機会を窺っていた。だが又八は意に介せず、一派の摘発^{てきはつ}を続けさせている。

織部が横暴を極め、彼を含めて一派の者が私腹を肥やしているとの悪評は家臣のみならず領民にも知れ渡り、悪事を摘発している又八を^{たた}称える声^{せひょう}が圧倒的であった。世評に一派は彼を^{ひそ}謗りながらも鳴りを潜めざるを得なかったのである。

太田又八に家臣領民は尊敬の念を抱いていたが、峻烈さに^{いふ}畏怖の念も抱いていた。その又八が突然目の前に現れた。作造が緊張したのも無理はなかった。だがその緊張感もすぐ解けた。又八の気さくな物腰によってである。

世評からさぞかし^{れいり}伶俐、不敵な面構えを想像していたのだが、実物は表情に^{にゅうわ}柔和さを漂^{ただよ}わせ体格も 5 尺そこそこの小柄な男で、^{いさ}些かの威圧感も他人に与えない。

「寒いなか御苦労、御苦労。おかげで^{ちやくい}着衣を汚さず参拝ができる。御苦労」と言う。作造は

又八に親しみを感じた。

「お主と少々話をしたい。時間はさしてとらせない、いかがかな」家老が百姓に掛ける言葉ではない。又八の気さくな態度に作造は恐縮するのみである。

「宮司殿、暫時部屋を借りしたい」と言えば宮司に否応のあるはずもなく、すぐさま離れ家に案内された。二間だけの書院造の家屋で賓客の控間として利用され、殊に正月七日の間は炭火を絶えさせていなかった。部屋には又八と作造のみで、供の侍は坪庭に面した廊下に控えさせていた。

「路上の仏を埋葬してくれたそうだな。礼を言う」又八は火鉢に手をかざし、そう切り出した。作造は平伏したまま頭を上げない。

「面をあげてくれ、それでは話ができぬ」と言っても作造は伏したままで、「もったいのうございます」と言うのみである。これでは話が進まぬと思ったのであろう、又八は話題を変えた。

「今年は豊作になろうか。そうでなくては困るのだが・・・」

「恐れながら今年も豊作にはなりません」作造がようやく口を開いた。又八の眼が一瞬光った。(百姓が使う言葉ではない。この男、武家の出なのか)だが、その表情はすぐ消えた。

「早はそうはあるまい。大風も豪雨も3年続いたとの話は聞かぬが」

「早がなくても、大風が吹かなくても豊作にはなりません」

「わからぬ。理由を申せ」

「御家老さまは御存じのはずでございます」

「その方の存念を聞きたいのだ。遠慮なく述べよ」

作造は躊躇っていた。『百姓の分際で政に口を挟むとは何事だ。身分をわきまえよ!』と怒りをかうかもしれぬ。だが御家老ならわかってくれるかもしれぬ。その思いが交錯していた。

「いったん口にしたのであろう。ならば思いを述べよ、遠慮はいらぬ」

「恐れながら申し上げます。餓えのあまり種籾まで食べ尽くした百姓が数多おります。郷に見切りをつけ他国に流れる百姓も出ております。それも働き盛りの若者たちです。種籾が不足すれば田植えに支障が生じ、働き手が減れば田畑の手入れ、用水路の整備に怠りが生じます。このようなありさまでは気候に恵まれても豊作を望むことは無理でございます」

又八は頷いた。作造の指摘を認めたのであろう。

「なるほど、それではどうすればよいのか。考えがあろう、述べてみよ」

もう作造に躊躇はなかった。

「誠に恐れ多いことではありますが、お上(丸岡藩)から百姓に米を貸与されることをお願

い申し上げます。餓えを^{しの}凌げれば百姓が郷を離れることはございません。種^{たね}があれば翌年の米作に励めます。収穫時、利息を含めて返済することにしたらいかがでしょうか」

「成程百姓は助かるな。だが窮しているのは百姓だけではない。既に年貢の^{すで}減免もおこなっており、ためにお上は^{きゆう}窮しておる。家臣も俸禄を削られ暮らしに窮しておる。皆が苦しいのだ。第一お上には貸与する^{よゆう}余裕がない」

「お言葉を返すようですが、御家中が窮しておられるのは年貢が不足しているからではないでしょうか。それならば作物の増収を^{はか}凶り年貢を増やすことが^{かんよう}肝要かと存じます。ですが二年続きの凶作で百姓は^{こんきゆう}困窮、郷も^{ひへい}疲弊しております。来年の増収は見込めません。立て直すために^{かね}銭、生きるために米が必要です。もちろん^{あきんど}商人から借りることもできるでしょうが、困窮した百姓の足元を見て法外な利息を求めてきます。借りれば地獄、結局田畑は取り上げられます。お上のお慈悲をお願い申し上げます」

「貸与する^{かね}銭、米は商人から借りねばならぬな」勝手なことを申すなど^{げんがい}言外に込めて言う。
「お上なら低い利息で借りられます」

「凶々しさも^{きわ}極めれば腹も立たぬ」又八は^{あき}呆れて、問う。

「凶作が続き返済ができなかったらどうする」

「それでも貸与を続けることをお願い申し上げます」

「お上はたまらんな。百姓にかわって^{しやくざい}借財を背負い込むのか」又八は大声で笑った。

その笑いに誘われ、作造は失言した。

「一年や二年の凶作で百姓を見殺しにすれば、その先気候に恵まれたとしても豊作は望めません。年貢は落ち込んだままでございます。御家老さまが申されたように三年続きの早、大風は^{いにしえ}古より^{まれ}極めて希でございます。三年続きの凶作があるとすれば、それは^な為すべきことを為さなかったために引き起こされた凶作です。手立てを^{こう}講じれば防げます」

「百姓を救わなければ災いはお上にも及ぶ、度重なる凶作は無策ゆえとでも言いたいのか」又八は声を荒げた。

「無礼はお許しく下さいませ。百姓をお救い下さるようお願いをしているのでございます」作造はそう言うと、再び平伏した。だがその背筋は^{ピン}と張り（その通りでございます）と語っている。

強情な男よ、己を曲げようとしな。又八は苦笑した。

（^{たんりよ}短慮なところはあがるが^{ごうき}剛毅な性格が気に入った。俠気も^{きようき}熱意もある、働き場所を与えれば役に立つ）

「その思いが路傍の仏を弔わせたのか」又八の言葉が穏やかになった。だが作造は顔を上げず平伏したままである。

「施米の回数を増やすことを約束する。商人にも協力させる。ただ種籾の貸与は無理だ、お上に肩代わりなぞできぬ。だが種籾が不足すれば収穫が減る。百姓も困るがお上も困る、商人も困る、皆が困る。それを防ぐ手立てとして借米の利息を低く定める。貸し方は定められた利息以上を求めてはならぬ、貸すことを渋ってもならぬ、背けば罰する旨の定書（法令）を出す。

これなら百姓が高い利息に苦しむことはなかろう。商人にしても得られる利息は減るかも知れぬが、不作となれば商いが振るわぬ、豊作となれば商いが盛んとなる。損得は明らか、さして反対はしないだろう。作造、これがお上の手立てだ」

「ありがとうございます、ありがとうございます、・・・」畳に頭をこすりつけ、いくども感謝の言葉をくりかえした。

「凶作は今回で終わりではない、これからも続く。そのときにもお上に縋るのか。だがな、お上は餓死者、欠落（故郷を捨て他国に移ること）が続出し、国が乱れぬ限り動かぬ。それが政だ。それに頼ってはいは惨めさから抜け出せぬ。それでよいのか、作造」

又八は南宋（1127～1279）の儒学者、朱子（1130～1200）が創設した『社倉』を語った。

社倉とは飢饉に備えて郷村ごとにもうけられた穀物の保管庫をいう。互助的性格を有し、農民が任意で参加でき、運営は農民自身でおこなう制度である。但し素行不良者、富裕者は除外された。

これに対して『義倉』という制度が隋（581～618）の時代から用いられてきた。義倉は諸侯（領主）から庶民までが参加し、運営は役所に任されていたのだが、諸侯、役所の腐敗により、不正流用が横行する事例が発生した。そのため官に頼らず民でおこなうという考えから生まれたのが『社倉』であった。

※ 江戸時代、朱子学が武家社会を中心に広まり、社倉の導入が図られた。だが諸藩が導入したのは藩が主体の備蓄制度である『義倉』であった。本来の意味での『社倉』も農村で導入されていたとの説がある。

※ 日本における『社倉（義倉）』の先駆者は会津藩初代藩主、保科正之（1611～1673）であった

その骨子を紹介したい。『会津松平家譜』『近世会津史の研究・上』『会津藩の崩壊』より引用。

- (1) 承応3年(1654)、保科正之は南宋の朱子が創設した社倉法を領国の会津藩に導入した。会津藩の社倉法は『貧民救済用の貸米備蓄制度』で
- (2) 天災・飢饉・火災、その他不時の災害の被災者、医療・救貧・新田開発・土木治水工事に限って貸与された。
- (3) 農民は年貢収納時に年2割の利子米をつけて返納した。
- (4) 農民は年貢収納後、残った米で次の収穫時まで暮らすのだが、貧農の場合、次の収穫時まで米がもたなかった。そこで会津藩は村高100石あたり貸米20俵(8石)の割合で夫食米(食用米)を貸与した。農民は年貢収納時に2割の利子米をつけて返納した。夫食米の一部は社倉米から賄われた。
- (5) 種籾まで食用にしてしまった農民のため、会津藩では村高100石あたり金1両を貸与した。農民はその年の暮れまでに2割の利子をつけて返済した。
- (6) 寛文3年(1663)には規模を拡大して領内23組(1組あたり1万石高)に倉を建て、各々に籾4万6千俵(米2万3千俵 9,200石相当)を備蓄させた。
- (7) 寛文8年(1668)、保科正之は自らが制定した「家訓15か条」のなかで、「社倉は民のためにこれを置く。永利(先々の利益)のためのものなり。歳饑えれば(飢饉の年)、即ち發出して(即座に発動させて)、これを救うべし。これを他用(他の目的に流用)するべからず」(14条)と定めた。

会津藩の導入後、諸藩でも社倉(義倉)が採用された。共通しているのは藩主に儒学の素養があり、藩政改革に積極的だったということである。

丸岡藩の場合はどうか。藩主・重益は幼い頃より天真爛漫の気質を有し、父母に溺愛されて育った。その結果、我儘怠惰となり文武に励むことを嫌った。重昭の死去に伴い14歳で藩主の座につくと老臣・本多十郎左エ門が後見役として藩政をきりまわして事なきをえていたのだが彼の死去後、重益が前面に立つと無能さを曝け出した。家中の信頼を失った重益は藩政への意欲を失い酒色に溺れ長所である天真爛漫さが消え疑心暗鬼の藩主となった。そこに付け入ったのが本多織部だった。

暗愚な藩主・重益と奸臣・本多織部では藩政改革の熱意もなく、『義倉』が何であるかも理解できず、ましてや民百姓のために多額の藩金を投入することなど歯牙にも掛けないであらう。

作造に約束した施米の実施であれ貸米の利息引き下げであれ、いかなる提案であっても、それが又八から発案されたものであれば織部は強硬に反対する。だがこれだけは通さねばならぬ。作造に指摘されるまでもなく、百姓の窮状は理解しており対策を講じていた。

又八が作造に逢って話しをしたいと言ったのは、作造に興味を抱いたこともあったが、彼が考えている貧農救済策に百姓である作造の反応を確かめることにある。又八は自信を深めた。後は織部に有無を言わせず認めさせるだけだった。その策は講じてある。

さらに恒久対策として『社倉』の創設を考えていたのである。本来の形である百姓による百姓の為の『社倉』を模索していた。それは百姓自身が推進せねばならぬ。推進役である在野の人材を探していた。作造がその一人に成り得るか、又八は観察していたのである。

社倉制度を作造は眼を輝かしながら聞いていた。語り終わると又八は告げた。

「作造、一月後に我が屋敷に参れ」

「はい」作造、今度は平伏せず、又八の顔を直視して答えた。

「楽しみにしておる」笑いながら彼は席を立った。